

## 白河学フィールドワーク 10

平成22年3月28日

修学遠足

テーマ・・・几号水準点の残る街道

高橋由一が描いた白河地方の風景

目的地・・・白坂関の明神～九番町権兵衛稲荷神社

西郷村下黒川～白河市女石

### 几号水準点の残る街道

「白河学」の講義やフィールドワークを重ねてきて、福島県南部を軸とする視座を持つようになり、歴史や自然や其処での暮らしを考えると、県南地方への他所からの進入口が気になってくる。フィールドワークで幾ヶ所かの関所跡や明神様、塞の神など歩いてみた。やはりその時代時代によっての道路、街道が重要であることが少しずつ理解できる。道筋ルートも変遷するようだ。戊辰戦争の戦地ともなり、嵐の吹きぬけた白河地方にも明治の新時代は僅か数年で訪れたのだろう。と言うのも、明治8年にはもう東京～塩竈間を新政府は測量を実施する。東山道というか奥州街道の整備拡充が図られる先駆けなのだろう。その痕跡が白河を貫く国道294号線に沿って残されていると知ったため、是非、「白河学」でも郷土に残る文明開化の残照を眼と写真に焼き付けようとフィールドワークの課題とした。それは「几号水準点」というものであった。

几とは辞書を引くと机のことであると書かれている。正に水平なテーブルの下に三脚を立てたような図案、測量時の平板やレベルを構えたような記号（漢字の不のような）が測点として神社の石塔や地蔵の台座など既存の石に刻まれていた。

3月28日、寒い春の朝に数名が集合して栃木県からずっと続いてきたであろう測量点、福島県内第1号は白坂関の明神の石垣に見つけた。



明治新政府は近代化を目指し、技術、文化、色々な部門で外国からの技術者を雇い入れる。土木、測量などにも多くの外国人技術者が入国する。R.h ブラントン、等と共にマクヴィンが三角測量、を実施し、「日本地図」を完成する。日本奥地紀行のイザベラ、バードもこれを使用したようだ。東京～塩竈間の水準測量もマクヴィンが担当する。



手のひらに隠れる大きさの測点マークが土に埋もれるようにして石垣に彫りこめられていた。発見したとき皆で「オー」と歓声を上げてしまった。現在の道路盤より3メートル位高いところから古い石段が積みあがっている。この峠の切り通しも長い時をかけ改修を繰り返し、堀下がったのだろう。神社境内も「従是白川領」の石柱もずっと高い所にある。

気を良くして次の点を白坂中学校跡地の先の馬頭観世音碑の台座にくっきりと「不」のマークを見つける。また全員の歓声！



次に皮籠の地蔵台座からも直ぐに見つけて写真に撮る。途中、参加者から直ぐ其処の「金売り吉次」の墓や鍛冶屋遺跡と一里塚を見たいと希望があり、寄り道する。



鍛冶屋遺跡近くの一里塚に立つと白河学の講義で習った通りこの道は南湖方面を向いている。この時代の白河へ行く道は今の国道の道筋ではない。



しかし今日の私達は明治8年の測量方向である九番町へ向う。

白河市九番町「権兵衛稲荷神社」の常夜灯台座にもあった。しかしここも石段を登った上であつてすこし先や後ろが見づらいのでは、と皆で考える。下にある石に刻む年号や配置を考慮し、ここも道が下がったのか、あるいはこの台座位置から以前は前も後ろも見渡せた風景だったかもしれない、と。明治の風景を空想した。



### 高橋由一が描いた白河地方の風景

中学生のころ図工の教科書で見た縄で吊るされた鮭の半身の油絵が印象に残る。高橋由一は誰もが其処から知る。画家由一の風景画を見たのは何時だったであろう。たしか万世大路、とかの題のトンネルの絵であった。今の福島一米沢間の国道13号線にある栗子トンネルにあたる明治の風景であった。その後、道路県令と呼ばれる三島通庸に抱えられ会津地方、山形各地、に同行し、道の風景をスケッチする。それは新しい国土建設のための貴重な資料となって今日に残っている。特に甲子山の陰の下郷―若松間は大内峠、火玉峠が主なルートであったため今の湯の上、芦野牧コースは大川沿いが切り立った崖状で危険極まりないものであった。そんな当時の景色を教えてくれる。此処を三島は道路貫通させる。

(明治11年、東日本の奥地を北行して、坂下へ抜けて奥地紀行を実行したイザベラ・バードも大内宿コースを辿っている。) そんな時代の風景を由一の絵で知ることが出来る。

近代国家建設を急務とする新生政府は国土建設の手始めを道路に重点を置いて進めていったことを郷土の中にも見て取れる。

さて、我が白河地方のスケッチ画は栃木県境黒川地区から始まる。皆で一旦国道4号栃木県側から旧国道を下黒川地区に下る。この地区には3枚のスケッチがある。この地区は12年前の集中豪雨の後、河川工事で河畔の景色は一変している。皆でスケッチ位置を確

かめる。彼方此方に散らばって遠景、近景確認する。案外山、森、不変なものがあって「ここだー。」と歓声をあげる。由一のスケッチ画のコピーを資料として何処から描いたのかを時空を超えて、探すのが今回のテーマである。



白河市、女石の風景スケッチは今も向寺から4号線に至る切り通し風景があまり変わりがなく直ぐわかって、S字カーブの峠路はどちらから見ても同じようであり、皆であっちだ、こっちだと歩き廻る。



白河地方の道路の現在に至るまでの発展の残照を見た気がして、春の日のまだ寒い遠足の日であった。